

ピロリ菌のはなし

健康診断や人間ドックなどでよく耳にする「ヘリコバクター・ピロリ(ピロリ菌)」とは、1980年代に発見された胃の表層粘膜に生息する“らせん型”的細菌で、人間の胃粘膜のみに感染します。感染経路についてははっきり分かっていない部分も多いですが、一つには、胃酸の少ない幼児期に食べ物の口移しなどで感染するとも言われており、除菌をしなければ、胃粘膜が破壊されて菌が自然消失しない限り感染は生涯にわたって持続します。一方、成人になってからピロリ菌に感染することはほとんどありませんが、感染しても一過性のもので、持続感染することは少ないと言われています。

ピロリ菌感染は、胃がんや萎縮性胃炎、胃十二指腸潰瘍など様々な疾患を引き起こす可能性があるため、除菌することが推奨されています。特に抗血栓薬や非ステロイド性抗炎症薬(ロキソニン等)を使われる方は、潰瘍予防のための積極的な除菌が必要とされています。

検査は、内視鏡で採取した組織を顕微鏡で観察したり、菌体が作り出す酵素の量を調べたりする方法と、内視鏡を使用せず、呼気や血液・尿・便の検査によって確認する方法があります。当院でも患者さんの背景や使用薬を考慮しながら検査方法を選択し

内科医師 そうまなおと
相馬直人

ています。

治療と効果判定は、2種類の抗菌薬等を7日間欠かさず内服し、4~8週間後に呼気試験で除菌の成否を判定しますが、中には抗菌薬に耐性を有するものもあり、初回の除菌で失敗した場合は抗菌薬を変更して二次除菌を行います。それでも除菌できなかつた場合は、専門機関をご紹介する場合もあります。除菌後の再感染率は年1%以下と言われほとんどありませんが、除菌した後は今まで抑制されていた胃酸の分泌が強くなつて逆流性食道炎や胃食道接合部のがんのリスクが上昇し、まれですがピロリ菌に起因しない胃がんを発症する可能性もあります。そのため、除菌後も症状に注意しながら、6ヶ月~1年後に内視鏡検査で経過を観察することをお勧めします。

健康講座開催のお知らせ

日 2月14日(木)午後2時~3時30分

場 丸広百貨店東松山店 3階文化教室

定 25人(申込順)

内 健康診断のすすめ ~健康チェックと外来受診のキッカケに~

講師 工藤安幸主幹(市民病院健診放射線科)

申・問 市民病院管理課 ☎24-6111 FAX 22-0887